

茨城県農業総合センター
平成25年度評価書

平成26年11月

茨城県農業総合センター
評価委員会

【様式6】

□総合評価

評価： A 試験研究機関に期待される役割や目標等に照らし合わせ、質・量の両面において着実に取り組みを実施していると判断できる。

(平成23年度:A 平成24年度:A+)

センター内の調整、適切なタイミングでの研究テーマの進捗管理、積極的な新しい研究テーマの企画立案など、バランスのとれた優れたマネジメントを行っており、プロジェクトチームの編成、消費者との対話の促進、所内公募研究の創設などの工夫も認められる。

一方で、他機関との連携、内部人材育成のための職員の人脈育成、情報収集力向上、院生等の外部人材育成などにはまだまだ課題が残っている。研究者の学会発表や研究会等への参加の機会を確保していくとともに、博士号取得者15名以上を背景に科研費申請機関化することなども検討して欲しい。

□項目別評価

i) 県民に対して提供する業務

1) 試験研究

評価： A

①茨城県オリジナルメロン「イバラキング」の高品質生産技術の開発

有効積算温度による熟度判定技術を確立し、収穫の目安となるタイミングや糖度の非破壊検査に応用できる検量線を明らかにするなど、評価できる。

今後、さらに高品質な高級メロンとして差別化販売ができるよう、安定した高品質栽培法の細部の確立、収穫適期の精度向上などに努力することを期待する。また、その特性(糖度先行タイプ、硬度の低下が遅い)を生かした販売手法の提案、アピール等が必要だと思われる。

②茨城県の気候に適するリンゴ優良品種・系統の選定及び化学農薬削減技術の確立

温暖化や県北地域に適したリンゴの優良系統・品種の選定、主要害虫の発生活消長を明らかにし効果的な防除法を開発したことは評価できる。

競争力の高い品種の開発は喫緊の課題であり、新品種の選定は重要である。今後、どのように現地での生産拡大に結び付けていくかが重要であり、生産者の評価などを踏まえ迅速な対応を望む。

③小麦新品種「さとのそら」の安定生産技術の開発

コムギ「農林1号」から「さとのそら」への全面切り替えが進むなか、栽培マニュアルの提示と生産現場への情報提供など、高品質・安定多収につながる生育量に応じた施肥法を明らかにした成果は評価できる。

しかし、本課題は北関東3県の共同研究であり、そのなかで本県が特に力を入れ、独自の成果を上げた部分はどれなのかなど、十分な説明が不足している。茨城県では低湿地での不利な条件下での栽培条件を行っていることを踏まえ、研究の重要性・独自性を追求し、普及に繋げてほしい。

2) 広報・情報提供

評価： A

マスコミや消費者を対象としたセミナーを直売所で開催する新たな取り組みなど、前向きな取り組み姿勢は高く評価できる。

消費者交流イベントの参加人数も大幅に増加している。さらに、職員が刺激を受けるバイヤーやプロの人達の意見を聞く機会を模索するとともに、新品種発表や画期的な成果の発表については本庁で記者と勉強会を

3) 成果の普及活用促進

評価： A

研究開発段階からの生産現場等との連携は重要であり、それを具体的に推進するための新品種育成普及プロジェクトチームや技術体系化チームの活動の定着は、高く評価できる。

生産目標や販売戦略を明らかにした普及拡大方針に基づく取組をさらに進めてほしい。

4) 技術指導

評価： A

概ね計画通りである。臭化メチル代替技術などの緊急課題に対応していることは評価できる。

5)技術相談・依頼診断

評価： A

質・量とも概ね計画通りである。
技術相談・診断依頼の対応は、公設試としての重要な業務サービスであり、今後とも迅速かつ丁寧に取り組んでもらいたい。

6)知的財産権の取得活用

評価： A

一定の成果が上がっていると思うが、出願数が少なく、具体的にどのように農業の振興に役立っているか、フォローアップする必要がある。
より積極的な活用を図るためには、研究機関としての戦略策定と支援部門が必要であり、今後の検討課題である。

7)原原種の維持・生産

評価： A

農業県にとって、極めて重要な課題に真摯に取り組んでいることが評価できる。

8)施設使用

評価： A

施設の外部利用については、普及センターの活用が積極的に行われている点は評価できるが、さらに一般への利用促進の手立てとして、備品設備等が外部利用出来ることの広報も考えていく必要がある。

9)外部人材育成

評価： A

インターンシップによる研修生の受け入れの取り組みは評価できる。その効果(評判)検証をしてはどうか。
また他県の公設試を参考に、外部人材育成と内部人材育成の両面から院生等の専門家を育てること、研究職員の後継者を育てることに努力して欲しい。これは、マンパワーの補充、職員の研究能力向上、職員の指導力・計画作成能力の向上にも役立つ。

10)教育活動への協力

評価： A

概ね計画通りである。農業大学校、教育庁などの教育活動への協力を努めたことは評価できる。

11)他機関への協力

評価： A

概ね着実に実施しているが、行政機関や関係団体との連携、協力関係をもう少し具体的に示してもらいたい。特に、特徴的な要請はどんなものがあり、どのような対応をしたのか、等。

12)東日本大震災への対応

評価： A

国の委託プロジェクトに参画して放射能にかかる知見の集積を果たすとともに、分析業務の実施等を通じて、県の農産物の信頼回復に努めた。

ii)業務の質的向上、効率化

1)全体マネジメント

評価： A

センター長が自らリーダーシップを発揮し、課題の重点化や予算確保、先端研究への取り組みの強化、さらには若手研究者を対象としたセンター内公募研究を試行するなどの高いマネジメントは評価できる。
今後、未来型技術開発マネジメントチームによるニーズの掘り起こしに期待する。また、任期付や流動研究員制度をもっと活用してほしい。

2)他機関との連携

評価： A

つくばの独法研究機関との連携を恒常的に実施するほか、全農いばらきとの連絡会議の設置、ベトナムと本県の農業協力の覚書締結のため国家主席の視察受け入れなど役割成果についてアピールしたことなど、評価できる。

同じ県庁内の普及機関との連携よりも、外部機関との協力を重点的に評価すべきと考える。今後は、技術開発に直接かかわる共同研究先を広く他機関に求めるなど、広範な連携構築に向けた努力を期待するとともに、大学、国研、公設試、企業生産者などに分類して記述するとセンターの方針や連携の意味が理解しやすいと思う。

3)外部資金の獲得方針

評価： A

資金獲得への努力、競争的資金等への積極的な応募の取り組みは評価できるが、過年度対比の数字(件数、金額)を出したうえで、総括すべきである。

研究人材の集積を活用した科研費等獲得への取り組みを期待する。また、外部資金に頼らない県単予算の枠拡大に努力して欲しい。

4)県民ニーズの把握

評価： A

各方面のニーズの把握、特に消費者ニーズの把握の仕組みはできているので、研究・技術開発に当たっては、当事者と一体となった取り組みが重要である。

農業現場の構造変化が急速にすすんでいることから、経営の動向などの狙いを明確にして生産者のニーズ把握にも取り組まれない。

消費者ニーズ調査はセンターがやるのか、本庁がやるのかわからないが、数字的には少ないように感じた。

5)内部人材育成

評価： A

センター長裁量のなかで、若手育成に向け、また研究員のモチベーションアップのため、センター内公募研究を立ち上げたことは挑戦的な試みとして、高く評価できる。

ただ、公募研究の採択率を少なくとも30~50%にしないと広く若手の動機づけに結びつかないのではないかと。間接経費の利用など精査し対応を期待する。

また、学会、研修会への参加、発表及び情報収集の機会が非常に少ない。これでは、大学・農研機構、他県の農業技術センターとの連携、人脈作りはもちろん維持すらできないのではないかと。専門性向上と視野拡大は研究職員に絶対的に必要であることから、もっと外で情報収集する機会を設けて欲しい。

【様式7】整理表(項目別評価)

農業総合センター

評価項目(年度実施計画)		研究所等の自己評価		評価委員会評価	
		評価	計画達成の状況	評価	評価における特記事項
i) 県民に対して提供する業務	1) 試験研究等	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p> <p>①茨城県オリジナルメロン「イバラキング」の高品質生産技術の開発 ●有効積算温度が多いほど食味評価が高くなり、1,125℃を越えた日を収穫日とした区で最も高かった。さらに、有効積算温度に基づく収穫方法を現地圃場で実証した結果、果肉が適度に軟らかく、糖度がやや高い状態で収穫できた。 ●非破壊で「イバラキング」の糖度を測定できる検量式を作成した(主要成果で公表)</p> <p>②茨城県の気候に適するリンゴ優良品種・系統の選定及び化学農薬削減技術の確立 ●主力品種「ふじ」の着色系統の中から、「長ふ12」が着色及びミツ入り等の果実品質が良い優良系統であることを明らかにした(主要成果で公表)。 ●優良品種の少なかった9月収穫では、黄色中生品種「トキ」が果肉硬度や日持ち性に優れ、食味の良い優良品種であることを明らかにした(主要成果で公表) ●主要害虫8種類の発消長を明らかにした。 ●特に被害が増加している「ヒメボクトウ」についてフェロモントラップ調査により、雄成虫発生のピークを捉え、幼虫の発生時期となる7/中～下旬の防除適期を明らかにした。 ●シンクイムシ類及びハマキムシ類の発消長に基づく、交信攪乱剤とBT剤の使用により、化学殺虫剤を用いた慣行の防除法と同等の効果を確認した。</p> <p>③小麦新品種「さとのそら」の安定生産技術の開発 ●「さとのそら」について、茎立期及び出穂期、成熟期のデータを基に生育予測モデルを作成した。 また、「さとのそら」の高品質・安定多収(目標収量500kg/10a, 検査等級1等)を得るための生育量に応じた施肥法を明らかにした(主要成果で公表)。</p>	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p> <p>[付帯意見] 茨城県が低湿地での不利な栽培条件であることを踏まえ、研究の重要性・独自性を追求し、普及に繋げてほしい。</p>
	2) 広報・情報提供	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p> <p>消費者を対象としたセミナー、農業経営士との意見交換会、ホームページ更新、マスコミへの取材対応などにより積極的に県民への情報提供を行った。 特に、「いばらキッス」「イバラキング」「ほしこがね(干しいも)」「ふくまる」等の新品種については、これまで当センターで開催していた消費者との交流会をポケットファームどきどき牛久店で開催し、研究成果の展示と研究員が店頭で新品種に関するアンケートを実施するなど取り組みを拡大した。 また、マスコミを介した情報発信については、引き続き各所が情報提供に取り組むとともに、県庁記者クラブの機能を活用し、情報提供先を増やす取り組みをおこない、平成25年度は57件が記事になった(前年度46件、23年度30件)。 計画項目や担当部署によって達成率の差はあるが、全体としては当初計画を十分達成した。</p>	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p>
	3) 成果の普及活用促進	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p> <p>メロン「イバラキング」やいちご「いばらキッス」、水稲「ふくまる」など5品目の育成した新品種について新品種育成普及プロジェクトチーム活動と主要課題現地検討会の開催を通じて、新品種の普及推進や有望系統の普及性評価を行った。 また、普及にあたっては県庁関係各課や普及センターと連携し、生産目標や販売戦略を明らかにした普及拡大方針に基づき一体となって推進した。 技術体系化チームについては、栗「ぼろたん」の生産・活用体制の確立など8チームを設置し、研究成果等を活用して生産現場の課題解決にあたった。そのうち1チームは、独法から客員普及指導員として研究員を招聘し、その知識や手法を活用しながら取り組んだ。 計画項目や担当部署によって達成率の差はあるが、農業総合センター全体としては当初計画を達成した。</p>	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p>
	4) 技術指導	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p> <p>新品種「ふくまる」等の生産拡大や臭化メチル剤の全廃に対応したピーマン栽培の代替技術の普及などを重点に、普及センターと連携した栽培講習会、現場での技術指導を行い、効率的な技術の普及に努めた。 計画項目や担当部署によって達成率に差はあるが、技術指導は各部署とも実績を上げ、全体としては当初計画を概ね達成できた。</p>	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p>
	5) 技術相談・依頼診断	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p> <p>農業者や一般県民からの訪問や電話による園芸作物等の技術相談、土壌診断や病害虫診断など依頼診断について迅速かつ丁寧に対応した。特に、普及センター等からの園芸作物のウイルス病診断依頼について、分子生物学的な診断法により積極的に対応した。 具体的な実施目標を立てていないが、実績は県民の要望に十分にに応じることができたと考えている。</p>	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p>

【様式7】整理表(項目別評価)

農業総合センター

評価項目(年度実施計画)	研究所等の自己評価		評価委員会評価	
	評価	計画達成の状況	評価	評価における特記事項
i) 県民に対して提供する業務	6)知的財産権の取得活用	A ○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成 品種では登録されたものはないが、H25年度に新たにコギク3品種が出願公表となった。また、特許では、農機会社と共同出願した「局所施肥方法、及び施肥ノズル」が特許取得した。なお、天敵微生物「ポーベリア・バツシアナ12B菌株」が出願公表された。許諾件数は、品種がナシ「恵水」とH25年度に出願公表されたコギク3品種の4品種が新たに許諾契約を結び、許諾件数はH23からH25までで合計12件となった。品種・特許とも積極的な取得・活用に努め、農業の振興に役立てることができたと考えている。	A	○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成
	7)原原種の維持・生産	A ○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成 育成品種・系統の種苗を保存し、必要に応じて増殖し、園芸いばらき振興協会等に提供した。また、グラジオラスウイルスフリー球根を増殖し、グラジオラス球根協会に提供した。計画項目や担当部署によって達成率の差はあるが、全体としては当初計画を概ね達成できた。	A	○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成
	8)施設使用	A ○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成 平成25年4月に関係機関に利用可能な機器一覧を提示し、備品・設備等の外部利用を積極的に進めた。特に、普及センターの実証圃の品質調査用の食味測定機器(味度メーター)等の施設利用や簡易暗渠施工機械の利用が増加した。具体的な実施目標を立てていないが、実績は県民の要望に十分応じたと考えている。	A	○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成 [付帯意見] 備品設備等が外部利用出来ることのPRを進める必要がある。
	9)外部人材育成	A ○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成 県庁インターンシップ受入制度の活用や茨城大学との意見交換を行い、6名をインターンシップとして受け入れた。農家や農業団体等については、(公社)農林振興公社と密接に連携して果樹や花き組合等の研修受入れを行うなど、県内外の農家等の視察研修を積極的に受け入れた。計画項目や担当部署によって達成率の差はあるが、全体としては当初計画を十分達成したと考えている。	A	○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成
	10)教育活動への協力	A ○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成 農業大学のカリキュラムにより研究科生11名を約1年間受け入れ、指導をおこなった。また、H24年度と同様、地元幼稚園、小学校の体験学習を受け入れた。農業高校の教育活動への協力については、教育庁主催会議において受入れ内容を提示するなど新たな働きかけを行なった。この連携をきっかけに、新たに教育庁主催の小中高生の「作ろう料理コンテスト」の産地見学会の受け入れに繋がるなど連携を上げることができた。実績は前年に比べ、小、中学生の体験学習受入れや一部の農業高校での実習援助・現地指導が増加した。全体的に当初計画を概ね達成できた。	A	○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成
	11)他機関への協力	A ○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成 国、県関係機関の主催する会議等への出席などを通じて事業に協力し、研究成果の施策への反映を図った。また、県、市町村、農業団体等が主催するイベントや審査会に協力して、農業者の生産意欲や栽培技術の向上等に寄与した。そのほか、ベトナムと本県の農業協力の覚書締結のため来県した国家主席の農業施設視察を受入れ、大使館や外務省への協力をし、研究機関の役割・成果をアピールした(26年度からベトナム研究者の研修受入れ予定)。当初計画全ての項目において目標を上回り十分達成したと考えている。	A	○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成
	12)東日本大震災への対応	A ○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成 県の検査機関として、分析業務に的確に対応し、県産農産物の信頼回復に努めた。また、土壌中の分布状況調査及び農作物の移行係数検出事業への協力については、国の委託プロジェクト等に参画し、研究として対応した。具体的な実施目標を立てていないが、実績は県民の要望に十分にこたえたと考えている。	A	○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成

【様式7】整理表(項目別評価)

農業総合センター

評価項目(年度実施計画)		研究所等の自己評価		評価委員会評価	
		評価	計画達成の状況	評価	評価における特記事項
ii) 業務の質的向上・効率化のために実施する方策	1) 全体マネジメント	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p> <p>実務的な中核会議である研究調整会議において所の運営等の連絡調整を行うとともに、併せて開催した未来型技術開発チーム会議において、特別電源補助金の研究資金の獲得、独法機関の成果の実用化等について検討を進め、先端技術の開発に向けて取り組んだ。これに際しては、センター長をトップに研究体制の整備や課題の重点化、予算の確保等の方針をまとめ取り組んだ。その結果、平成26年度の特別電源補助金等の研究資金は課題数が増加し、予算額も平成23年度対比で156%となった。特に、県の重要施策として、高軒高ハウスを利用した長期どりトマトの先進的増収技術開発に取り組むこととなった。</p> <p>また、任期付研究員や流動研究員制度の活用により研究体制を維持するなど、全体的に当初計画を十分達成したと考える。</p>	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成 [付帯意見]</p> <p>センター一本でデータを取りまとめることが妥当ではないか。</p>
	2) 他機関との連携	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p> <p>つくば地区研究機関との連絡調整会議の開催等により共同研究を推進し、49課題を実施した。</p> <p>また、普及センターと現地試験等を通じて積極的な情報交換・連携活動を行った。特に、コギク産地においてプロジェクトチーム活動を通じ、普及センターやJA等と密接に連携して需要期に安定出荷できる技術の確立を支援した。さらに、全農いばらきとの連絡会議を設置して連携を深め、販売戦略を踏まえた研究の推進を図った。</p> <p>計画項目や担当部署によって達成率の差はあるが、全体としては当初計画を十分達成したと考えている。</p>	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成 [付帯意見]</p> <p>同じ県庁内の普及機関との連携よりも、外部機関との協力を重点的に評価すべきと考える。</p> <p>大学、国研、公設試、企業生産者などに分類して記述してもらえると、所の方針や連携の意味が理解しやすい。</p>
	3) 外部資金の獲得方針	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p> <p>平成25年度の競争的資金等は、11件応募し、6件採択され前年度に比べ増加した。特に、表面研削玄米に関する課題が国の委託プロジェクトに採択され、当センターで初めて医療機関との連携課題の取り組みとなった。</p> <p>なお、平成26年度の競争的資金等への応募は、15件応募した。</p> <p>さらに、JA全農いばらきと連携を深め、レンコンの優良系統選抜に加え、26年度から新品種「ふくまる」の販売戦略に基づく高品質栽培技術の開発にも取り組むこととなり、受託研究費を拡充することができた。計画項目や担当部署によって達成率の差はあるが、全体としては当初計画を十分達成したと考える。</p>	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p>
	4) 県民ニーズの把握方策	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p> <p>種々の機会を捉えて、市場、生産者および消費者の新品種、新技術に対する評価・要望を把握した。特に、コギクやピーマンについてJA主催の販売対策会議に参加し、市場関係者と積極的に意見交換を行うなど、市場ニーズの把握を行った。また、昨年に引き続き、当センターで開催した消費者との交流会でアンケート等により消費者ニーズの把握を行った。担当部署により達成率の差はあるが、当初計画を十分達成したと考える。</p>	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p>
	5) 内部人材育成	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p> <p>研修計画に基づき、基礎研修、農家研修の実施、依頼研究員制度等を活用した独法への派遣により研究員の資質向上を図った。また、研究員のモチベーションアップのため、センター内公募研究(若手研究員能力開発型研究事業)を試行した。</p> <p>各研究所では、学会発表、職場研修を実施し、特に、生工研においては所内セミナーを毎月1~2回実施して研究員のレベルアップを図った。</p> <p>計画項目や担当部署によって達成率の差はあるが、全体としては当初計画を十分に達成したと考える。</p>	A	<p>○質・量の両面において概ね平成25年度計画を達成</p> <p>センター長裁量のなかで、若手育成に向け、センター内公募研究を立ち上げたことは挑戦的な試みとして、高く評価できる。</p>